

60

近代日本における医師と活動写真： 日本医学映画研究会および実験治療社に注目して

藤本 大士

大阪市立大学大学院 文学研究科 都市文化研究センター

医学映画に関する歴史研究は、これまで衛生映画に注目したものが多く、具体的には、結核やマラリアなどの感染症予防のためにつくられた映画などがあげられる。衛生映画に関する先行研究としては、田中誠二・杉田聡・丸井英二「マラリア予防教育映画「翼もつ熱病」とその変遷：第二次世界大戦後の彦根市におけるマラリア対策」（『日本医史学雑誌』59巻3号，2013年所収）などがある。衛生映画が、自治体や医療団体によって一般大衆の啓蒙のために製作されていたのに対し、本報告では、医師によって製作された医学映画を取り上げ、医師が研究・教育のために映画をいかに利用していたかを明らかにする。とくに注目するのが、1939年に発足した日本医学映画研究会、および、その事務局が置かれたが実験治療社である。

日本医学映画研究会の目的は、医学映画を通じ、医学の普及および発達をはかることであった。当初の事業内容として掲げられたのが、全国各地に所蔵されている医学映画の目録をつくり、それを毎年会員に頒布することであった。実際に、1939年度版および1940年度版の『日本医学映画目録』が製作、頒布されている。1939年度版の目録には、医学映画が500本以上掲載されており、各映画の題名、製作者、所蔵者、フィルム幅（36ミリ、16ミリ、9.5ミリなど）、フィルムの長さ、無声・有声、簡単な内容が示されている。掲載されている医学映画のなかでは、外科に関するもの（手術映画）が最も多いが、整形外科、内科、精神科、産婦人科、小児科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚・泌尿器科、レントゲン科などの各専門分科、および、生理学、衛生学、解剖学、薬理学などの学科に関するものも収録されている。

日本医学映画研究会の事務局は、大阪市東区道修町にある実験治療社内に置かれた。同社は1921年に武田長兵衛商店内に設立されたもので、開業医向けの医学雑誌『実験治療』を発行していた。実験治療社は、日本における医学映画輸入の先駆的役割を果たし、1929年にドイツ医学映画の輸入を開始している。輸入された映画のなかには、外科手術の標準的な術式を紹介したものから、珍しい症例を記録したものまで、様々な種類が含まれていた。社内には学術映画部が設立され、その社員が各地の医師会の希望に応じ、全国で医学映画の上映をしてみわった。留学をせずとも、ドイツの著名医師の技術を見ることができたため、その上映会はいつも盛況となった。その後、実験治療社は医学映画の輸入にとどまらず、日本人医師の手術撮影などにも乗り出した。日本医学映画研究会が設立されて、社内に事務局が置かれてからは、これまでの経験をもとに、会員たちの医学映画製作・撮影・上映を大いに助けた。

日本医学映画研究会の幹事には、齋藤眞（名古屋帝国大学医学部教授）が就任した。齋藤は日本における脳神経外科学の先駆者として知られる人物である。齋藤はX線による血管撮影をおこなうのみならず、自身の外科手術の撮影もおこなった。たとえば、1939年の日本医学映画研究会第一回発表会において、「脳腫瘍」、「動脈瘤」などの手術映画を発表している。このときの発表会には、阪大の小澤凱夫、岡山医大の石山福二郎、慶応大の茂木蔵之助、台北帝大の河石九二夫、満大の高森時雄・今井利武らが自身の医学映画を上映しており、そのほとんどは手術映画であった。

以上のように、戦前の日本において、医者たちが積極的に映画・活動写真というメディアを、自らの活動のために利用しようとしていたことがわかる。医学映画に関する情報は、当時の医学雑誌や映画雑誌に断片的に残されている反面、フィルム自体はほとんど残っていない。今後、医学映画のフィルムを探し出していくことが目指される。